

闇を抱いて戦士たちよ

高城修三



闇を抱いて戦士たちよ

高城修三

新潮社

闇やみを抱いだいて戦士せんしたちよ

著者 高城修三（たきしゅうそう）

昭和五十四年 六月 五日印刷

昭和五十四年 六月 十日発行

発行者 佐藤亮一

印刷所 東洋印刷株式会社 製本所 植木製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三二六五一一 編集〇三二六五四一一

定価 九〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一章 肉のきしみ 5

第二章 五月の闇 44

第三章 金色の泡 103

第四章 謝肉祭 143

第五章 落城の朝 171

裝
面
·
多
賀
新

闇を抱いて戦士たちよ

第一章 肉のきしみ

かじかんだ指にあらがい、軀全体の力に反抗していた樫の棒が、不意に従順になったかと思うと、固い衝撃と共に金属的な音を散らして、ルクスの手のひらの中で狂暴に撥ねた。一つの行為に向けて隈なく組織されていた全身の筋肉が、予期せぬ抵抗に遭ってはじけ、たじろいで、困惑したような痛みが腕から肩へと走りぬけた。石が埋っていたらしい。

ルクスは鍬の柄を太ももに挟んで、痺れた両手を口にかぶせ、白い息を吐きかけた。湿った生暖かい感触がこごえた骨太の指をなめる。固く閉じた股ぐらから伸びている樫の棒の先端へ、視線が這っていく。赤錆びた鍬が枯れ草の中に喰い込んで、黒い土がむきだしになっている。新しく伸び出した根が、大気に触れたばかりのような白い光沢を見せながら、褐色の根が複雑に絡み合ってほとんど根の塊りに見える黒い土くれの中へもぐり込んでいた。一息つくと、鍬をとって石を掘り出した。転がり出た黒っぽい石は意外に小さく、拳ほどしかなかった。

ルクスは再び鍬を振り上げた。両手が肩の上までくると、後方に向う力を駄いっぱい受け止め、思いつきり地面に叩きつける。固くもつれている雑草の根を断ち切って大地に喰い込む心地よい感触が、ルクスの手のひらから腕へ、肩から全身へと伝わってくる。一瞬それ待ってから、大きな塊りを手元の方へおがし、鍬を反転させて、裏返った雑草の根を叩く。そしてまた鍬を反転させ、肩の上へ振り上げる。動作にはずみがついてくるにつれ、息が速くなり、駄が火照って、額にうっすらと汗がにじみ始める。枯れ草の下から青い芽が吹き出している。そこへ、赤錆に覆われた鉄が加速度を増しながら落ちていく。大地が鈍い悲鳴を上げる。黒い土が露出する。冬眠中の地虫が白いつややかな肌を見せて転がり落ちる。地中に秘められていた色や匂いが二月の寒気に晒される。鍬を反転させる。意識しないうちに、鍬が次の作業を求めて動く。単純で、考えることのない、確かな労働だった。

犬の鳴き声がする。ふっと目を上げると、白壁に赤い瓦をのせた瀟洒な南欧風の建物があった。楽友館だ。K大の教官たちが大正時代の装飾を愉しみながら研究会をもつための会議室から、結婚披露宴会場にもなるホール、レストラン、ビリヤードや麻雀のできる遊戯場まで、何もかもが小ぢんまりとおさまって、床には赤い絨緞が敷きつめられている。その楽友館の周囲にめぐらされた金網の破れ目を抜けて、白い雑種犬がためらいがちに近づいてくる。

「シロ！」

ルクスは手を休めて二つ三つ舌を打った。呼び声に元気づけられた小柄な犬は、成熟する一

歩手前の若やいだ動きで、ルクスメがけて一直線に走ってきた。肩や脇の骨がわずかに浮き上っている。ルクスの足元に駆けつけると、内から湧き上ってくるものを抑えかねるように尾を振って跳びはね、甲高い声で吠えた。目が愛くるしい。

「晩飯には、まだ間があるぞ。もうちょっと仕事をさせてくれよ、シロ」

ルクスはそう言いながらしゃがみこみ、シロの興奮を鎮めるように頭を撫でてやった。熱い舌が指の付け根にまわりつく。手のひらにうっすらとにじんでいる汗を舐めようとしているのか、かじかんだ指先を口先に押しつけても、首をねじって、手のひらばかりに舌を這わせてくる。

背後から含み笑いが落ちてきた。思わず振り返ると両腕を胸に組んで潮見が立っていた。端正な青白い顔が笑っている。びっくりして立ち上る。膝に立てかけていた鍬の柄が弧を描いて落ち、シロが短かい悲鳴を上げながら横に跳んだ。ルクスは悪戯いたずらを咎められた少年のようにかすかに頬を染めて、潮見にぎこちない会釈をした。

「なんだ、さっそく始めたのか」

「ええ」

「まだ、種を播くには早過ぎるんじゃないのか」

潮見は組んだ腕を解いて、両手を腰にすえた。ルクスは固い表情のまま潮見を見つめた。

「でも、種を播くためには、今のうちに雑草の根を切って、土を起しておかないと……。今で

も遅過ぎるくらいなんです」

「なるほど」

苦笑とも嘲笑ともとれそうな淡い笑みを洩らして、潮見は突然前屈みになり、ルクスの足元に転がっている鍬の柄に手を伸ばした。シロが低い唸り声を引きずりながら、怯えた仕草で後ずさりしてルクスの背後に身を隠した。

「この南庭は、長い間雑草が生えっぱなしで、根がびっしり地面を覆ってるから、土を起して冷たい空気を吸わせてやらなきゃならないんです」

「なるほど」

うわの空で相槌を打ちながら、潮見は鍬を振り上げ、腰に力を蓄えないまま地べたに打ち降ろした。鍬は半分ほど枯れ草の中に喰い込んだだけだった。

「ほう、意外と力の要るもんだ」

潮見が力まかせに鍬を手元へ引くと、わずかに雑草の根が盛り上ってすっぽ抜け、上体から無様によろめいた。

「難しいもんだな」

険しい顔で潮見が呟いた。

「馴れですよ。百姓仕事は根と馴れだけです」

十年以上も前にルクスが父から聞いた言葉だった。

「おまえは百姓の倅だったな」

潮見はルクスの方に鍬を差し出してから、ふっと想い出したように言った。ルクスは知ったかぶりをしてしまったと思って、どぎまぎしながら鍬の柄に手を伸ばした。潮見の指に手が触れる。細い華奢な指だった。ルクスはどきっとして唾を呑み込んだ。鍬を受け取ると、自分の骨太の指に目を落して、櫛の柄のなめらかでいて頑固そうな肌ざわりを確かめるように、何度も指に力を込めて握り締めた。しかし、そんな仕草を潮見がじっと見ているのに気づいて、慌ててしゃがみ込み、とってつけたようにシロを足元に引き寄せた。シロがルクスの開いた股ぐらに首を押し込んでくる。太ももの付け根に鼻をすり寄せて匂いを嗅ぐとする。

「去年は、西寮の空地をトウモロコシで埋めつくしたんだ。今年は、東寮か」

「トウモロコシも植えるつもりですけど、今年はもっといろんなものを作ってみたいんです。いいでしょ？」

ルクスは眩しそうに潮見を見上げた。

「いいとも。雑草のかわりに農作物で寮の庭を埋めつくすだけのことだからな。ただ、おまえがそれを収穫できるかどうかは、分らんぜ。西寮でだって、収穫する前に半分がとこは盗まれてしまったんだろう？」

「いいんです。手伝ってくれた人もいるし、余るほど残ってましたから」

潮見が唐突な笑い声を響かせた。

「そう言えば、去年の夏はトウモロコシを公設市場の八百屋に持って行って、しこたま儲けたそうだな」

「どうして知ってるんですか」

「有名な話じゃないか」

「そんなつもりじゃなかったんだけど、同室の喜多川が知恵を授けてくれたんです」

「そうらしいな」

「そんなことまで潮見さんの耳にはいつてるんですか」

ルクスは面映ゆい気持をシロの背中に撫でつけながら言った。潮見が自分に関心を持っていることが、誇らしいような気分だった。

「ああ、何でも耳にはいつてるぞ。儲けた金の半分は喜多川に巻き上げられたんだろう？」

「初めからの約束なんです」

ルクスはうつむき加減になって、消え入るような声で言った。

「欲のないやつだな。それにしても、荒地を耕やして、半年近くも働いて、わずか何千円にしかならんのでは、割に合わんな。あれだけの労働力を土方にでも注ぎ込めば、十万は固いぜ」

「いいんです。好きでやったんですから」

ルクスは固い声で潮見をさえぎった。

「銀杏ぎんなんを集めたり、干柿をつくったり、おまえも面白いやつだな」

「だって、誰も穫ろうとしないし、もったいなかったから……」

去年の十月ころ、東寮のイチヨウ並木の下で銀杏が踏み割られているのを見てから、ルクスは毎朝早くに西寮からやってきて銀杏を拾った。雨や風の強かった翌朝は、バケツに一杯近くも集めることがあった。拾い集めた銀杏は、ルクス自身も食べたが、大方は十一月下旬の寮祭で売り、八百屋へ運んだ。金に替えるのは、いつも喜多川の提案だった。また、西寮でたわわになっていた渋柿を穫って軒下にスダレのように吊し、これもほとんどを寮祭の夜店でさばいた。おかげで奨学資金の八千円だけで生活していたルクスに思わぬ金はいり、いくらか本も買うことができた。

「ところで、ルクス。いよいよ今夜だ。九時だからな、ちゃんと来いよ」

「今夜やるんですか」

ルクスは、整ってはいるがどこからともなく朴訥な感じの漂ってくる顔をいくぶん紅潮させて、潮見を見上げた。シロが性器のあたりに鼻をすり寄せてくる。ルクスは臍いっぱい熱いものを感じて立ち上った。この一週間ばかり、今日か明日かと待ち望んでいたのだ。臍が顫えているような気がした。

「なんだ、怯^{おそ}気づいたのか」

「怯^{おそ}気づいたりなんかしません」

ルクスはやつのことでそれだけ言うと、鍬の柄を握り締めた。

「そうだ、その調子だ。真面目に考え過ぎるなよ。考えすぎると、動きがとれなくなる」

潮見は額にかかった長髪を掻き上げながら言った。今まで話しかけていた口調とはどこことなく違った、ぶっきら棒で投げやりな、それでいて聞く者を威圧するような響きが隠れている、いつもの潮見の声だった。それに気づくと同時に、潮見さんとこんなに親しく話したのは初めてだ、と思いついて、ルクスは嬉しくなってしまうた。

潮見はルクスの反応などには興味がないという素振り、話し終ったかと思うと不意に背を向けて、もと来た方へ歩き出した。古い木造二階建の南寮棟が長く延び、その軒近くに葉を落した梶の木が並んでいる。潮見の行手には、濃い緑を大きく拡げた楠の巨木が二本ある。ルクスは矩形をした南庭のほぼ中央に立っていた。庭というよりも、古めかしい建物と樹木に囲まれた三百坪ほどの空地といった方が正確かも知れない。雑草が地表を覆っている他には、かつて役に立ったことのないコンクリート製の防火用水池がどんより濁った水をたたえて、南を遮る生垣の土塁近くにあるきりだった。楠の木の下で左に折れた潮見の姿が、南寮棟の角に消える。

ルクスは潮見の姿が見えなくなると、急に寒気を感じて身顫いした。北の方から拡がった雲が空を覆っていた。シロは待ちくたびれたように梶の木の根元にうずくまっている。ルクスは再び鍬を大地に叩きつけた。先ほどの快いリズムはもう感じられなかったが、それでも次第に息が荒くなり、冷えかけていた脉に熱が戻ってきた。

曇り空に夕暮れの気配が濃くなったところ、梶の木の下にうずくまっていたシロが不意に走り出して、激しく吠え立てた。シロを追って振り返ると、南寮棟の東端から二つの人影が現れた。がっしりした体格の男が、七、八メートルも離れて吠え立てているシロに向って、「ぶっ殺すぞ」と怒鳴り声を上げた。ゲバルト隊長だ、とルクスは思った。

「シロ、やめろ」

シロは低い唸り声を曳きずりながら、ほっとしたようにルクスの方へ後退してくる。

「ル、ル、ルクスカ」

もう一人の男が言った。枝葉を鬱蒼と上げた楠の木の落す闇に紛れて顔は判別できなかったが、ルクスはすぐに二回生の八代だと分った。

「こ、こんなところで、何しとんや」

「これです」

ルクスは鋏を差し上げて見せた。

「何や、こ、こ、こっちでも、ト、トウモロコシ植えるんか」

八代の口のまわりに集中された筋肉のあえぎが、まだろっこしく伝わってくる。ルクスが曖昧な返事をする、ゲバルト隊長の倉本が、酒の匂いをまぶしたような口調で言った。

「いつ、こっちへ越して来たんだ」

「今日です。退寮者が出たから、早く移れと潮見さんに言われて……」

「潮見がね……。まあ、せいぜい頑張ってくれ」

投げ捨てるように言つて、倉本は庭の東南隅にある南門の方へ歩き出した。近衛通りに向つて開いている南門は、去年まで汲取車はいって来るのに使われていたのだが、寮の便所が水洗化されてからはその必要もなくなり、その上、去年の春ごろから寮内で頻繁に盗難が発生し、手口がどうやら本職のものらしい、南門から不審者が出入りしている、と言ひ出す者があつて、寮の監察委員会が厚い木製の扉に貫木かんぎをかけ、施錠したうゑに太い針金を巻いてしまった。犯人が寮生であつたか他所者よそものであつたかはともかく、南門を閉した効果は拔群で、それから盗難はなくなつてしまった。

倉本が生垣の土塁にとりつく。敏捷な動作だ。

「どこへ行くんですか」

倉本は応えなかった。人の背丈ほどもある土塁を黙つて登っていく。

「あ、あ、『明日香』へ行くんやけど、き、君も来るか」

八代が立ち止つて、頭を振りながら言つた。

「だって、今夜やるんでしょ？」

あんな所に抜け道があつたのかと思ひながら、ルクスは精いっぱい声を張り上げた。

「ほっとけ、ほっとけ。あいつはルクスなんだぜ」

生垣の向うに飛び降りた倉本が、聞えよがしに陰のある声で言つた。